

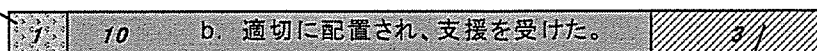
5. 青年海外協力隊への質問と回答結果

1.1 ホンジュラス側投入(カウンターパート、執務室、機材、運営費)について

(1) 研修関係者(PFC コーディネーター、教育委員会担当者等)は、質(知識、経験、意欲)、時期、人数について活動に支障なく適切に配置、支援を受けましたか。

(単位:人)

a. 申し分なく適切に配置され、支援を受けた。



c. あまり適切に配置されず、支援を受けられなかった。

(2) 貴方が活動するうえでの執務室、機材、運営費は適切に付与され、活動に支障はありませんでしたか。

a. 申し分なく適切に付与された。



c. あまり適切に付与されなかった。

1.2 日本側投入(プロジェクト専門家、シニア協力隊員、青年海外協力隊員、カウンターパート研修、機材、運営費等)について

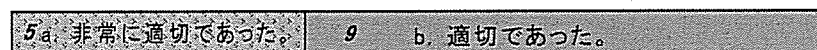
(1) 貴方の活動にあたっての日本側投入(プロジェクト専門家・シニア協力隊員・他の協力隊員の配置、カウンターパートの日本研修等)の時期(タイミング)、量(人数)、質(能力)については支障なく適切であったと思われませんか。

a. 非常に適切であった。(回答 0)



c. あまり適切でなかった。

(2) プロジェクトの機材や運営費の支援について、時期(タイミング)、量(数)、質(機能)について支障なく、適切でしたか。



c. あまり適切でなかった。(回答 0)

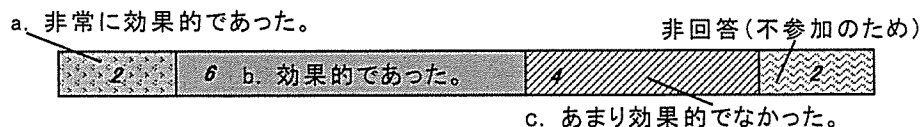
(3) 貴方が活動するうえで、プロジェクト日本人専門家との連携(情報交換、技術指導等)は効果的に行われていましたか。

a. 非常に効果的に行われていた。



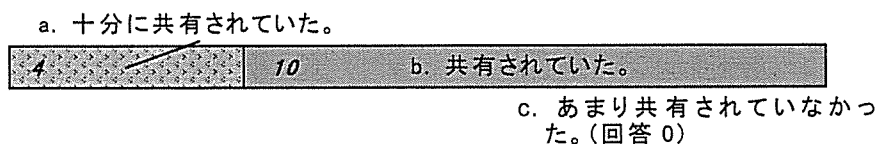
c. あまり効果的に行われていなかった。

- (4) 2005年1月に実施された青年海外協力隊広域研修(算数教育協力)は貴方の活動に役立ちましたか。



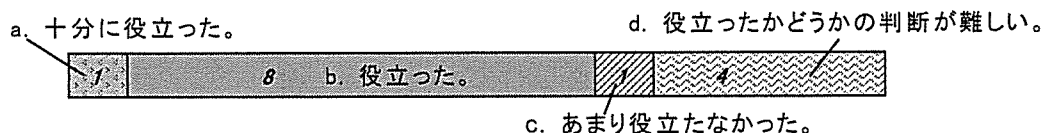
2.1 プロジェクト目標の共有度について

PROMETAM のプロジェクト目標である「指導書等の活用により、プロジェクト対象県における初等教育の第1課程と第2課程の現職教員の算数指導力が向上する」は専門家および協力隊員間で十分に共有し、共通の理解をしたうえで活動が行われていましたか。

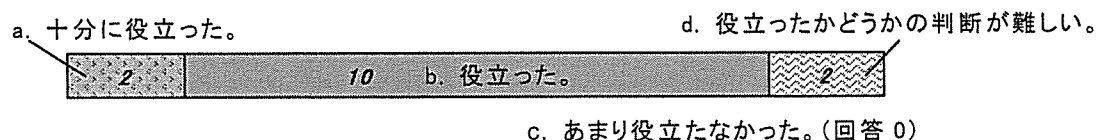


2.2 プロジェクト成果と目標達成度について

- (1) 貴方の活動は、教員の教師用指導書と児童用作業帳の利用促進や利用方法改善に役立ったと思われませんか。



- (2) 貴方の活動の成果は教員の指導能力向上に役立ったと考えられますか？



- (3) 貴方の活動成果により、教員の指導力が向上し、ひいては生徒の学力向上につながったとみなされる事例がありましたか。



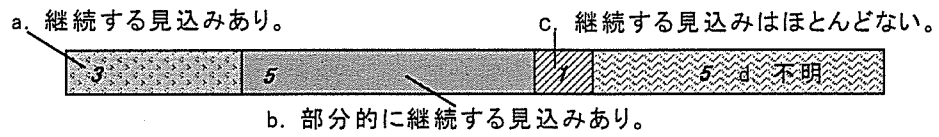
2.3 プロジェクト成果・効果の普及について

- (1) 貴方の活動で行われたことに関連することが、活動地域外(近隣の他県など)にて行われた例がありましたか。



3.1 プロジェクトの活動の継続・発展について

貴方のいなくなったあとで、同様の活動は継続し、発展していく見込みがありますか。



6. 帰国研修員に対するインタビュー結果

(1) ナバロ PFC 局長、PFC 関係者（オコテペケ、コマヤグア、エルパライソ、ソナグラ、ナカオメ）への研修の波及効果に係るインタビュー

① PFC 関係者（4名）

日本での研修は大変有効だった。研修者は、帰国後、日本の授業、授業研究の様子の強い印象を語り、積極的に報告機会を持った。周囲の者も、その発言、経験から授業について、広く学んだ。研修者は、それを積極的に導入しようと、研修に励んだし、その内容を他の指導者と共有した。現在も、PFC に係る中央 54 名の研修員の中核として活躍している。

② PFC 関係者（1名）

私のところの派遣者が充分活動しているとは思えない。中央 54 名、全員が日本に行けたわけでもない。研修者の選定はどのように行われたのか。どのような経過で私のところからその人が選ばれたのか分からなかった。帰国後その人にどのような仕事が義務付けられていたのかの情報を私は持っていない。

③ ナバロ局長

一人を除いて、帰国後、PFC 研修の中核として、研修に参加したメンバーは実際に非常によく活動している。我々は、日本で新しい指導法を学んだ。日本での研修中に、我々 17 人と他の研修員とで、我々コアグループを核とするピラミッド型の研修計画を作成した。帰国後、教育省に提言した。その提言で、日本で訪問した教員研修施設での研修方式が、具体的なモデルとなった。我々が、帰国後に計画した研修そのものは、予算を付ける交渉中である。各自、PFC における研修はもちろん、UPN における教育を改善しようとする人材を生み出したよい研修だった。

(2) 研修者に対する研修とその効果に対するインタビュー

① ナバロ PFC 局長

坪田先生の操作活動（Hands-on）にみるように、日本の教具は、ホンジュラスの教育改善をするうえで有効である。現在の PROMETAM の教科書と指導書は、充分ではなく、教具もふくめた教材を備える必要を感じた。日本の教育からは、教育課程とその実施方法、教科書教材、そして、日本人らしい授業を学んだ。日本の研修で、研修者は、新しい指導法を知り、教師の変容の必要を実感し、強い動機を得た。

200 人の高校教師をどうトレーニングするかが問題だ。中学校、高校と PROMETAM 方式を継続するには、日本の支援を期待したい。

② ヘラルド UPN 数学科長

本邦研修で、日本の授業とはどのような授業なのかが分かることで、PROMETAM のめざす新しい授業がどういったものなのか具体的にイメージできるようになった。プロジェクトの目標がはっきり分かった。帰国後、数学科長になり、UPN 側での PROMETAM への支援体制は万全となった。抵抗勢力もある。ホンジュラスの算数は、ヨーロッパ、メキシコ、チリのハイブリッドだった。今、日本式を導入しようとしている。これまでのやり方の方がよいと思っている人に日本式を導入しようとする事で抵抗感が依然にある。そもそも、数学者は権威主義者であり、分からないことを講義することが習慣になっている。そのような環境ではあるが、PROMETAM は学内でも関心の的となり、普及しやすい状況だ。

教育について日本で学んだ最大のことは、子どもの誤りから学ぶことだ。これまで子どもが誤ることは悪いことと考えていたが、そうではなくて、誤りにこそ、その子どもの考えが見出せること、子どもが知っていることを前提に教えようとするれば、その誤りから子どもの考えを認めて指導展開できるようになることが大切であることを日本で学んだ。項目としてあげれば、幾何作図ツール、授業研究、操作活動(Hands on)などである。帰国後、研修者誰もが強い動機を持ったし、研修を通してプロジェクトの目標とする授業や活動が分かったことで、誰もがそれに向かって活動できた。特に UPN では、e テキストを開発し始めるなど、PROMETAM に貢献する動きも始まった。

③ モントーファ前 INICE 所長

研修を通して、PROMETAM による教師教育で何が実現できるのかがわかり、強い動機を得た。日本における現職教員研修の仕方を学んだ。日本における教育課程の実施状況のモニタリングシステム、フィードバックの仕方を学んだ。(我々はやる気になっているが、日本のような専門家がいないので支援継続も必要だ)

④ ビルマ (ダンリ教育長)

教師による一方的な指導ではなく、子どもが自ら学ぶようにする授業はどうすればできるようになるのか、授業研究の仕組みを学んだ。学んだことの多くを実現したいと思ったが、まず、授業研究をすることにした。

帰国後、日本式授業研究を推進するために、保護者、教師が参加した研究授業を始めた。グイノペやオコテペケから参加した人が、互いに参観した授業に対して意見を述べ合った。ダンリ内、3 地域で同じような授業研究を開始した。

⑤ ソイラ (前オコテペケ教育長)

協力隊を通して体験したこと、想像したことを日本で実際に確かめた。日本の教育委員会の仕事の仕方、教員研修センターの仕事の仕方を学んだ。異なるアイデア、異なる方法があるのに協同して、情熱的に仕事をしていた。高校で生徒が掃除をしている姿一つに、日本の教育的価値を感じた。参観したどの授業でも教師はよく準備していたし、何よりも驚いたことに、教師は生徒の反応を事前に予想し、質問していた。坪田先生の授業は確かに子どもが考える授業になっていた。それこそが PROMETAM が目標とする授業であるこ

とが分かった。

研修に参加してみて初めて協力隊員が理想として語る授業や授業研究がどのようなものか分かった。帰国後、保護者、教師が参加する研究授業を度々行った。算数、小学校に限定することなく、幼稚園でも行った。教師が何故そうしたのかを問うこと、教師による授業の評価機会、何故を問われることで、授業がよくなっていくことが分かった。批判にさえなり、雰囲気が悪くなったとしても、結果は、よくなった。

⑥ リタ（ラパス教員養成校数学研修担当）

日本では、教師の態度、教育方法に強い印象を受けた。ただし、それは、日本だからできるというようなものではなく、日本とホンジュラスに違いはなく、我々もできるものであると認めた。帰国後、オープンエンドアプローチ、操作活動（Hands-on）を重視したプロジェクトを2校で実施している。60人の先生を対象に実施している。教具も我々で工夫して開発した。その学校の先生によれば、スペイン語より算数を子どもが好きと言うようになった。

⑦ 同僚（ラパス数学教員：非研修）

リタは、帰国後日本での研修を詳細に報告した。日本から何よりも我々が学ばなければいけないことは、話を少なくすること、生徒は誤りから学ぶのであり、誤ることは生徒が考えている証拠であること、日本の指導方法はたいへん有効であり、彼女はそれを我々に伝えると同時に、実践してみせた。

⑧ マルデン（インティブカ教員養成校長）

日本でどのように研修が組織的に行われているかを知った。帰国後、そく実行したことは、すべての教科で校内研修を始めたことだ。研修動機は他の面にも波及し、3日の教科書研修を5日伸ばすなど、自主的に実施できた。

⑨ フレディ（インティブカ教員養成校数学科主任）

日本の授業は、オープンで、教えることを楽しんでいる。子どもはすばやく解答し、先生を助けようとしている。そのような授業は、先生が話さずに子どもが話すようにすることで実現している。それを応用して子どもがもっと考えることができるようにしている。そのように教師が育つような教師教育がなされている。